

「けいれん」に出会ったらどうするか

目の前でお子さんが手足をつっぱってふるふる震えだし、呼びかけても反応がない、顔色は青黒くなる、と言った経験はおありでしょうか。目撃すると、慌ててしまい、このまま死んでしまうのではないかと恐れられたかもしれません。

このような「けいれん」は脳の異常な興奮によって起こりますが、「けいれん」には全身が激しく動くもののほか、一瞬動きが止まる、少しボーッと反応が乏しいなど、いろいろな形があります。

「けいれん」を起こす病気で一番多いのは「熱性けいれん」で、6歳くらいまでのお子さんの10人から20人に1人に起こり、その3分の1でくり返します。

「けいれん」をくり返して起こす病気にはその他に「てんかん」があり、100人に1人くらいの頻度ですが、その多くは治療によって「けいれん」が起こらない状態を保っていて、普通の生活を送っています。子どもの時期のてんかんで成長すると治るものもあります。



「けいれん」に出会ったときにはどうしたらよいのでしょうか？

短い「けいれん」があっても命に関わったり、後遺症を残すことはまずありませんから、慌てずに安全を確保して観察して下さい。

大切なポイントは、次の2つ

- ① ほとんどの「けいれん」は数分以内に止まります
- ② 「けいれん」の様子、経過（どのように始まって体の左右のどこがどう動いたか、呼びかけに反応があったかなど）はその後の検査や治療をどうするのかに重要な情報です

具体的には、次のようにして下さい

- まわりの危険なもの（とがったものや熱いもの）を遠ざける
- 時計をみて時間の経過を確認する
- 力が入っているのが取れたら嘔吐することがあるので顔を横向きにする
- 5分以上経過しても止まらないようなら救急車を呼ぶことを考える

やってはいけないことは、次の2つ

- 口の中にもものを入れない ➡ 傷つけたり、舌をのどの奥に押しやって呼吸が苦しくなったりします
- 叩いたり、揺すぶったりしない ➡ 「けいれん」が早く止まるわけではありません

私が以前に指導を受けたてんかんの専門医の方が、自分の子どもが熱性「けいれん」を起こしたときには慌てて時計をみる余裕もなかったそうです。専門家でもなかなか難しいことですが、あらかじめ知識を持っていれば少しは落ち着けるかもしれませんね。

【医療局長兼小児科診療部長 桑島 信】

